

氏名	黄華源		
学位の種類	博士（書道学）		
学位記番号	博甲第84号		
学位授与年月日	2011年3月18日		
審査研究科	文学研究科		
論文題目	台湾書法史の基礎的研究（1885年-1985年）		
論文審査委員会	（主査）	大東文化大学教授	河内利治
	（副査）	大東文化大学教授	安達直哉
	（副査）	大東文化大学教授	古谷稔
	（副査）	大東文化大学教授	澤田雅弘

黄華源 博士論文 審査報告

黄華源氏は、1959年8月19日、台湾台北市の生まれ。現在51歳。1980年7月台湾芸術専科学校美術科卒業、1982年9月から1986年7月まで中華民国行政院文化建設委員会美術科に勤務し、1989年9月から現在まで財団法人鴻禧芸術文教基金会鴻禧美術館の学芸員として勤務している。その間、1998年9月台湾芸術学院美術系入学、翌年1999年7月同系卒業。2000年9月国立台湾芸術大学造形芸術研究所（大学院）中国書画組碩士班（修士課程）入学、2004年7月同課程修了。2005年4月大東文化大学大学院文学研究科書道学専攻博士後期課程に入学し、現在に至る。また2008年9月より台北市立体育学院非常勤講師を務め、現在に至っている。

黄氏の専攻は中国書学で、主な研究成果に、

- ① 「20世紀の台湾書画研究のための基礎研究」
『書道学論集』第4号、大東文化大学大学院書道学専攻院生会、2007年3月、20～34頁
- ② 「日本書写書道教育史資料からの台湾書法研究」
『書道学論集』第5号、大東文化大学大学院書道学専攻院生会、2008年3月、14～30頁
- ③ 「再探日本書写・書道教育史資料対台湾書法研究提供之参考」
『書画芸術学刊』第5号、国立台湾芸術大学、2008年12月、293～321頁
- ④ 「清末至日治（1885－1945）社会変遷下の台湾書法考察」 レフェリー制有り
『二十世紀台湾書法発展回顧學術研討会論文集』、国立台湾芸術大学、2010年5月、83～108頁
- ⑤ 「台湾金石学導師呂世宜的一份研究材料兼論台湾金石学推手」 レフェリー制有り

『西泠印社重振金石学国際学術研究会論文集』、2010年12月、315～327頁の学術論文がある。

以上のほか、未発表の論考も加えて、「台湾書法史の基礎的研究（1885年－1985年）」の題目のもとに研究成果をまとめ、学位請求論文として提出するに至った。以下、審査結果を報告する。

1、論文の要旨および特色

清代末期から現代までの百数十年以上の台湾史のなかで、「台湾書法史」は一冊も刊行されていない。氏はこの現状を鑑み、「付録 1885－1985 台湾書法関係考察記事年表」の作成を行った。特に1945年から85年の40年分は、『台湾新生報』1945－1949、『中央日報』1945－1985、『中国時報』1955－1985、『聯合報』1952－1985、および『中央通訊報』、『民生報』などの当時の新聞記事から丹念に書法関係の記事を拾い集めたものである。この年表の編成は、氏の研究上のデータベースであり、本論文全体の基盤である。起点とした1885年は、清仏戦争後に清朝政府が正式に台湾を福建省から分離して台湾省を新設した年であり、これを起点に1985年までの100年間を研究対象として設定したものである。なお1986年には台湾史上初の野党、民主進歩党（民進党）が設立されている。

まず目次に従って全体構成を概観すると以下のごとくである。

第一章 序論

- 第一節 研究動機
- 第二節 研究目的
- 第三節 台湾書法史に関する先行研究の分析
- 第四節 研究テーマと範囲の設定
- 第五節 研究方法
 - 一 研究方法の論拠
 - 二 本研究の展開について
- 第一章 注釈
- 附表

第二章 社会変遷下の台湾書法の考察

- 第一節 清初と清末の台湾の時代背景と書法の関係
- 第二節 社会変遷と台湾書法の関係
 - 一 清代末期 1885-1895
 - 二 日本統治初期 1895-1919
 - 三 日本統治中期 1919-1936
 - 四 日本統治末期 1936-1945
 - 五 台湾回復初期 1945-1949
 - 六 中華民国政府台湾遷都以降 1949-1985

第三節 小結

- 一 1885－1985 台湾百年間の書法発展および時代変遷の脈絡
- 二 二つの発展遅滞期の意義
- 三 書法発展に影響した要素の複雑性

第二章 注釈

附表

図版

第三章 台湾書法界の交流状況の考察

第一節 考察の前書き

第二節 清代末期の書法界の交流状況

- 一 伝統書法の表現形式
- 二 文芸の風雅な集いのスポンサー（後援者）—富豪商人と名園

第三節 日本統治時期の書法界の交流状況の変化

- 一 日本統治時期の伝統書法の表現形式
- 二 文芸の風雅な集いと富豪商人の名園の興廃
- 三 日本統治時期の書法教育状況の新展開

第四節 台湾が中華民国に回復した後の書法界の交流状況の伝承と変化

- 一 台湾回復後の伝統書法の再進化
- 二 書法教育及び展覧会
- 三 書法交流における後援者の転換
- 四 書会組織の進展
- 五 展覧会の推進と発展

第五節 小結

- 一 清末の伝統知識人の書法活動の衰退と質的变化
- 二 展覧活動の進化及び展示会向けの方向転換について
- 三 書法活動賛助者の変化と発展

第三章 注釈

図版

第四章 書法文化財の発掘と考察

第一節 はじめに

第二節 新たに発掘された書法文化財

- 一 大正年間に刊行された呂世宜の金石学資料の木版
- 二 妙心寺蔵古文書
- 三 王行恭収蔵士林潘家往来葉書および鶯歌陶磁博物館収蔵葉書

第三節 台湾書法史の欠落およびその書法文化財の発掘

- 一 日本統治時期の台湾人書家
- 二 日本統治時期の日本人書家
- 三 日本統治時期の伝世書作の手がかり—目録内の書法文化財

第四節 小結

- 一 四点の新しく発掘された書法文化財の意義
- 二 台湾書法史の欠如と書法文化財の発掘
- 三 総合論述

第四章 注釈

附表

図版

第五章 結論

- 一 はじめに
- 二 台湾書法の輪郭と広がり
- 三 現代の書法活動の根源の追究
- 四 書法文化財の発掘と考察
- 五 総合論述

台湾書法研究循環構造図

附表

参考文献

付録：1885－1985 台湾書法関係考察記事年表

以下、目次に沿って、論文の要旨と特色を記す。

第一章 序論

本章は、研究動機、研究目的、台湾書法史に関する先行研究の分析、研究テーマと範囲の設定、研究方法の五節からなる。黄氏は1982年から1986年の五年間、台湾美術を中心とする展覧会の企画、運営に参画し、実施する職務を遂行してきた。爾来二十余年経った今も「台湾書法研究」は依然として理想的に進んでいないと指摘する。よって本論文は、台湾書法と社会変遷の関係およびその発展の脈絡を考察するための基礎的研究として、後に続く研究の基盤を定めることをねらいとしている。本研究は書法史の範疇ではあるが、書家、書作だけを中心とした研究内容ではなく、書法の発展と社会の変遷の基礎資料とするための研究であるとの視点を明確にする。そのため「付録：1885－1985 台湾書法関係考察記事年表」を作成した。この書法関係の記事による「時間軸」を明確にした上で、史学、文学、芸術学などの研究成果と方法を援用しながら、多方面の考察と論証を行うと論じる。

第二章 社会変遷下の台湾書法の考察

本章は、政治状態、産業と経済、社会変遷と教育、書法の発展の四つの視点から、一般的な台湾史研究における社会変遷と台湾書法との関係を考察する。清代末期 1885-1895、日本統治初期 1895-1919、中期 1919-1936、末期 1936-1945、台湾回復初期 1945-1949、中華民国政府台湾遷都

以降 1949-1985 の 6 期に分け、台湾書法の大きな流れを考察する。

清代末期は古い伝統のはじまりである。日本統治初期は、科挙が廃止され、日本風の教育を導入した時期で、教育の普及、書法人口の増大という変化をもたらした。中期は、日本の影響が徐々に増え、清代の影響が弱まり、増減相俟つという両面共存の状態であった。末期は、戦争のために台湾書法は停滞期に入る。台湾回復初期は、内乱により停滞期が継続する。中華民国政府台湾遷都以降は、反共産主義が国策となり、1953年に総統蔣介石が文化改造を呼びかけ、台湾書法の活動は徐々に熱を帯びる。1956年の「中日書法教育展覧」は戦後初の正式な国際交流として、韓国、東南アジア、欧米各地にまで広がる。60年代後期に大陸で文化大革命が起こり、台湾は「文化復興運動」を起こす。70年代の国際関係は台湾にとって不利になるが、台湾内部の政治は一応安定し、経済が成長し、教育が普及し、台湾書法は1980年代に頂点を形成したと論じる。

第三章 台湾書法界の交流状況の考察

台湾書法界の交流状況は、その交流形式から考察すると、伝統から現代までの流れを掌握できる。それを清代末期、日本統治時期、中華民国以降に大きく三分して考察し、以下の三点の現象を指摘する。

1、清末の伝統的な書法は「書齋型」の書法を主とし、日本統治以後は「展覧型」が中心になり、ともに現代まで継続されている。これは台湾書法の本質に影響する重要な側面である。

2、文芸の風雅な集いの後援者は、清末では富豪商人と名園が、日本統治時期には民間の団体が主力であった。台湾回復以降は、政府と民間団体が一つとなって推進したため、1980年代に一つの頂点に達した。

3、日本統治時期に展覧会を中心とする「展覧型」体制の基礎が固まった。台湾回復以降、書法教育界には「学生美術展覧会」「国語国文コンテスト」などのモデルが登場する。「誕生祝いの美術展覧会」と「軍の文化芸術展覧会」が台湾回復初期に書法のステージを提供した。「全国美術展」と「台湾省美術展」は、書法が展覧部門に入った公の大型展覧会の代表であり、書法を国家の文化として発展させ、他の分野の地位と平等にした。さらに画廊の展覧活動は場所と自由化を促進し、作品に商業価値を与えた。加えて日本、韓国との国際交流は、台湾書法を盛んに発展させた主要要因の一つである。

以上から、現代の台湾書法の活動は、日本統治時期の基礎の上に進展してきたといえる。その活動のエネルギーは、完全に展覧会活動を中心とすると論じる。

第四章 書法文化財の発掘と考察

上述の各章の輪廓と脈絡の整理を踏まえた結果、台湾書法史を全面的に考察するには、依然として史料不足の問題があることを発見したため、新たな書法文化財の発掘と考察を行いながら論じている。

1、史料不足は、どの時期にも存在している。本章では新しく4点の書法文化財を発掘した。

「大正年間に刊行された呂世宜の金石学資料の木版」、「妙心寺蔵古文書」、「王行恭収蔵士林潘家往来葉書」、「鶯歌陶磁器博物館収蔵葉書」である。これらは金石学の文献、清末書法教育の実情、日本統治時期書家の往来の実態、民間書写の変遷の実物証拠である。

2、台湾書法史の研究は、日本統治時期が最も不十分である。書家は日本人書家と台湾人書家ともに全面的に研究不足である。台湾人書家では、清代に生まれ、1950年以前に没し、芸術成果を挙げたと評価される人物に洪雍平と洪以南がおり、「觚舄双璧」と称される。鄭鴻猷と施梅樵は「鹿港二大書家」と称され、劉曉村は日本で「書道の横綱武蔵山」と尊ばれた。この他、羅秀恵、杜逢時、張純甫、王少濤、李逸樵、鄭神宝、余塘らがおり、彼ら12人はみな高く評価されている。日本人書家では、長年台湾に住み、台湾書法の発展に貢献した者を優先する。山本竟山以外に5人の書家が挙げられる。そのうち尾崎秀真は台湾に30年住み、台湾書画界との交流が非常に深い。須賀蓬城、平島正登はそれぞれ日本統治前後期を代表する書道教育専門の書家である。久保天随、澤谷星橋は台湾籍の書家との往来があり、同様に台湾で死去した書家である。日本の統治時期の伝世書法作品の調査は、研究上の基礎的な仕事であるが、三冊の図録によって、台湾書法と関係が密接な作品21点を整理して挙げた。新しい出版物の中には、伝世作品の手掛かりをつかみうるものも含まれるが、誰の何時の収蔵、作者、作品と台湾との関係等の問題があり、またそれをも研究し考察する必要がある。

第五章 結論

以上の各章節をまとめ、全体として以下の五つの観点を提起する。

- 1、書法の発展の脈絡は、主に政治史の時代区分を補い、かつ独自の構成を打ち立て得ること。台湾書法史の研究上、これが最も基本的な研究方法論となりうること。
- 2、台湾書法は展覧会を中心に発展するという趨勢を見出し得たこと。
- 3、台湾書法史の研究のためには、書法文化財を継続して発掘する必要があること。
- 4、史紫忱教授は確かに台湾の書法美学研究の先駆者であり、これをも含めた理論研究を重視しなければならず、それは台湾書法の発展にとって重要な方向であること。
- 5、輪郭を考察して脈絡を把握し、その脈絡から研究における専門テーマの細分化を行い、それがまた輪郭の考察へと戻るという第一循環が、第二さらに第三へと循環していくこと。これが台湾書法史研究の最も実務的研究の構造であること。それを、「台湾書法研究循環構造図」によって図示し得たこと。

2、論文の審査内容および評価

本論文は、第一章序論、第二章～第四章本論、第五章結論、および「付録：1885－1985台湾書法関係考察記事年表」からなる。

第一章序論は、研究動機、研究目的、先行研究の分析、研究テーマと範囲の設定、研究方法の

五節からなり、そのいずれも適切に書かれている。附表1「国家図書館台湾博碩士論文系統2010年5月以前」に記述される86本の先行研究の論文題目に見えるとおり、1885年から1985年までの百年間におよぶ時期を対象とした論文は見当たらず、その意味において「付録：1885-1985台湾書法関係考察記事年表」は、氏がねらいとした台湾書法研究の基礎的事項を網羅しており、将来に貢献しうる大変な労作であると高く評価できる。

第二章社会変遷下の台湾書法の考察は、全三節からなり、そのいずれも適切に書かれている。1885年から1985年の百年間は、政治上の区分に従えば、清代末期、日本統治時代、台湾回復以降の三時期に分けうるが、政治、経済、産業、教育の実態、それらと書法との関係から、細分化して6期に区分した。言いかえれば、台湾社会全般の変遷と書法文化との脈絡の大枠を追いかけたものである。そのなかで特に日本統治中期1919-36は、清朝伝統の継続と日本教育の普及により書法文化に両面性が見られる点、台湾回復以降1945-85は、経済発展と文化大革命の影響などにより書法文化が80年代にピークを迎えるという点は、穏当な指摘であり首肯しうる。

第三章台湾書法界の交流状況の考察は、本論文の中心となる一章で、全五節からなり、そのいずれも適切に書かれている。「付録：1885-1985台湾書法関係考察記事年表」は、100年間の書法文化活動全般に亘る膨大な記事を編纂したもののだが、その資料を時期と内容に拠って整理し得ている。時期は第二章を受けて3期に分け、内容は詩文と手紙、詩社と文社、富豪商人と名園、学校と社会の書法教育、展覧会、書会と書画会、国際交流などの項目に整理して考察を加えている。これまで時間的に長い時間を扱い、かつ内容的に広領域を扱った論文が無いだけに、この一章は特に高く評価してよい。「書齋型」から「展覧型」への移行や、日本統治時代に築かれた展覧会とコンテストが台湾回復以後に継承され発展したという指摘は、精緻な論述である。

第四章書法文化財の発掘と考察は、台湾は高温多湿の風土のため紙幅に書かれた作品が伝来しにくい環境にあるが、台湾全島を調査して実際に新しく4点の書法文化財を発見したこと、ついで台湾人と日本人の書家を研究するための3冊の展覧会図録を精査したこと、そして書法理論、とくに書法美学研究のための提言を論述する。全四節からなり、いずれも適切に書かれているが、第三節の書家の代表的遺品の研究が必要であり、さらなる考察が待たれる。

第五章結論は、如上の各章で論じた研究成果を踏まえ、これからの台湾書法の研究の方法と方向について五つの観点に帰納した。基本文献の整理と分析、書法理論の研究の推進、文化財調査と発掘という三つを一体化して推し進めること、そのためには書法の大きな輪郭の考察、脈絡の把握、専門研究テーマの細分化が循環するという書法研究循環構造を掌握する必要があると論じて結ぶ。それらはいずれも穏当な観点であり、台湾書法史研究のみならず、日本書道史や中国書法史の研究においても有益な観点であると高く評価できる。

総じて、全体の論理の展開、各章間の構成、各章内の分節、すべてにおいて明確であり、適切であると評価する。

3、結論

審査委員会は、本論文の審査を委嘱されて以来、直接の指導を行い、口述試験を行った。口述試験では、各委員が本論文に対して質疑し、黄氏はそれらの質問すべてに回答した。付録「1885－1985 台湾書法関係考察記事年表」は大変貴重な年表であり、論文題目の基礎的研究の名のとおり、今後の基礎資料として研究者が有効活用できること、そしてそれをもとに組み立てた論旨が極めて明解であること、さらに新発見の書法文化財にまで言及した視野の広さがあるなど、委員全員が傑出した重要な論文であると高く評価した。ただし本論と年表をもう少し関連させる必要があることが指摘された。この指摘は優れた論述であるが故のさらなる要望である。よって審査委員会は、全員一致で口述試験を合格と判断した。以上の審査内容および評価に基づき、本論文を審査の対象とする博士学位審査委員会は、黄華源氏が博士（書道学）の学位を授与されるに適格であるものと判断し、ここに報告する。